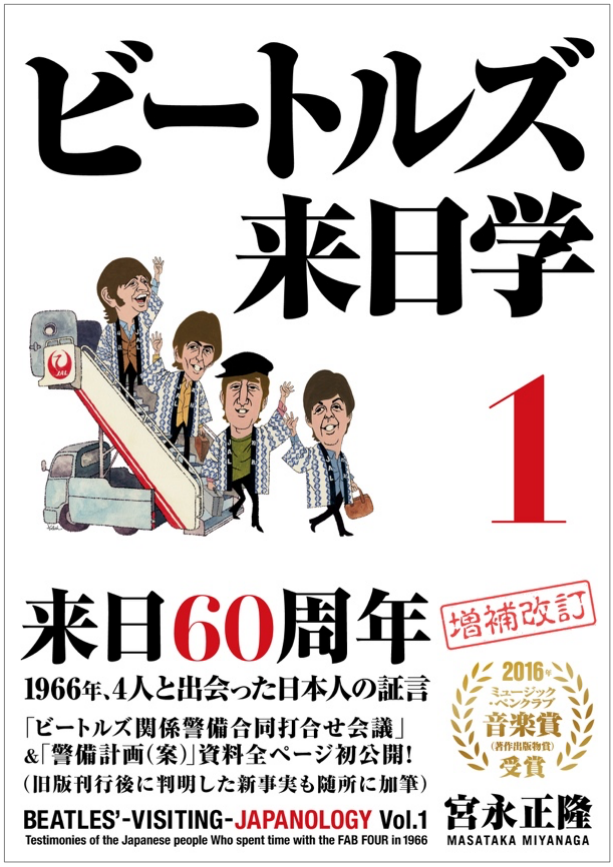
RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2026 年 4 月 17 日
株式会社リットーミュージック

ビートルズ来日 60 周年！　1966 年、4 人と接した日本人の証言
『ビートルズ来日学』が初公開資料・新事実もプラスされた増補・新装版として復刊



インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『ビートルズ来日学　1』を、2026 年 5 月 20 日に発売します。

本書は、1966 年初夏ビートルズ来日時に彼らと接したさまざまな立場の人々のインタヴュー集。登場するのは、4 人が日本に向かう日航機にあえて同乗した会社員から、武道館公演を TV 放送した日本テレビのディレクター、移動に使われたキャデラックの運転手、滞在した東京ヒルトンホテルのスタッフ、さらにはビートルズが購入した古美術店スタッフなど。膨大な知識に裏打ちされた評論活動が「ビートルズ大学」として浸透している音楽評論家・宮永正隆が、4 人の素の姿を浮き彫りにし、ビートルズが日本にいた 5 日間の細部を次々と明らかにしていきます。

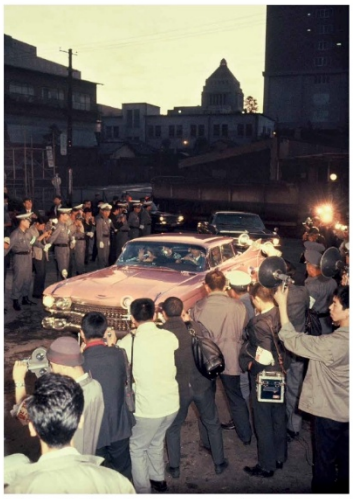
原本は雑誌『レコード・コレクターズ』の長期連載をまとめる形で 2016 年に刊行され、「ミュージック・ペンクラブ音楽賞・著作出版物賞」を受賞するなど業界内外で高い評価を得た『ビートルズ来日学』（DU BOOKS）。今回の新装版では、旧版では 2 ページのみ公開していた「ビートル

ズ関係警備合同打合せ会議」&「ガードマン勤務要綱（案）」書類を全ページ初公開。その後の新事実も随所に加筆しています。

書名に『1』とあるとおり、執筆中の続編にもご期待ください。

2-2：重岡氏に微笑む“ボール”。鞠丸マークがはっきり写っている（撮影：重岡良蔵）

2-1：アンカレッジ空港で。窓からはサングラスをかけたボールの顔、車外にはブライアン・エプスタインも見える（撮影：重岡良蔵）



1966年6月29日午前4時過ぎ、羽田空港から東京ヒルトンホテル前に到着したビートルズ、昇りかけた太陽による国会議事堂のシルエットが美しい。「週刊朝日」1966年7月15日号にも掲載された名写真だ（提供：朝日新聞社）

—映像で見ると、羽田に最初に着いたときビートルズはピンクの方に乗っていますね。

肥田　あれ、あれ、あれ、あれがワケありなのよ。これ誰にもどこにも言ったことがなかったんだけど、羽田からホテルだけピンクに乗った理由は、ガソリン切れなんです。メーター見たら一目盛くらいしかなくてヤバいんですよ。「これ途中で止まっちゃったら大変だ」って、俺が永島さんに相談して、「じゃピンクに乗せよう」ってなったのよ。

—どの時点で相談したんですか。

肥田　黒に永島さんを乗せて羽田に向かってる最中。もう、半分なんてもんじゃないんだもん。下まで下がってんだもん。だから、あのときだけピンク。あとは、ビートルズが日本にいる間じゅう、全部黒。

—言われてみれば確かにそうです。じゃあ、本当は一番いい車は黒なんですか。

肥田　黒。あれは全部俺が運転したの。黒は他の誰も運転しない。

—黒は、他の日は熱狂的に大丈夫だったんですか（笑）。

肥田　うん、大丈夫だった。

—じゃ、お迎えのときは満タンにして用意してたんじゃなくて、うっかり。

肥田　いやいや、前の日に満タンにしてたのよ。でも俺、あの赤坂あたりの細い路地を慣らし運転してたんだよ。あんなでかい車って、俺運転したことないから。コンチネンタルの桁じゃないんだから。でかいでかい（笑）。ガソリン満タンに入れて120リッター入るんだけど、まさかリッター800mしか走らないなんて知らなかったの。

—練習していたら知らぬ間に減っちゃっていたと。

肥田　（うなずく）

—羽田空港からビートルズがあのピンクのスマートなデザインの車に乗って来た絵づらを知っている我々には、もうそれ以外イメージしづらい状態である。そのくらいしっくりハマっているのだ。それは「近代的」で「若々しい」何かを象徴するものとして多くの人の無意識の領域に刻まれているからに他ならない。想像してほしい。もし、大物政治家的な重厚なデザインの方に乗っていたら、と。「ビートルズ来日」がまったく違った印象になっていたはずだ。これを「神様の凱旋」と言わずして何と言おう。

—ピンクは、尾翼のような部分がスポーティーですよね。

肥田　確かにピンクはスポーツ・タイプなんですよ、どっ

れて東京に観に来てたんですよ。東京では、世田谷にあった私の家に泊まって。そのときに彼女は「警備はすごく厳しいんだけど、何か思ったほどの厳しさがない部分もあった」「どこまで厳しいのか、よくわかんなかった」って僕の女房に話してたんです。
――どういうときに感じたんですかね。
伊藤　うん。何か、立ち上がったり何かしたら静止するくせに、後ろの出入口の方には警備はだーれもいないと。彼女は、後ろの方の悪い席だったから出入口がよく見えたらしいんですよ。だから普通なら、出入口があったらそっちもガードしてなきゃいけないはずですよね。だけど警備なんか誰一人いなかったって言ってたんですよね。
――つまり、右翼が予告どおりに乱入したとしたら、まったく防げるような状態ではなかったと。
伊藤　じゃないかと思うんですよ。いや、もちろん、下で防げる状態だったのかもしれないですよ。でも、「あんなんだったら、右翼でも誰でも入って来れちゃうじゃないの」と彼女は思ったっていう話でした。
いろんな意味で、リアリティに溢れる貴重な証言だ。ビートルズ来日時の警備に関して、私は竹中労氏が唱えるところの「要人来日の警備シミュレーション」説を経て、自分なりの新説を抱いている。あれは「右翼の妨害予告からビートルズを守るため」のみならず「日本の青少年がビートルズに感化されるのを防ぐため」だったという説である。#26でも言及したとおり、ビートルズ来日の騒動は、日韓ワールドカップ合同開催時の「すわフーリガン上陸か」というあの不穏な空気と、地下鉄サリン事件のとき青少年を取り込むカルトに国家が抱いた不気味さが合わさった騒ぎだったと推理しているのだ。ビートルズの場合、勲章ももらっているため邪険にも扱えない。よって「右翼からの保護」を口実に、日本から出国するまで青少年と接触させぬよう隔離し続けた。
体制側のスタンスをこう仮定してビートルズ来日の狂騒劇を眺めれば、どれもすんなり整合するのだ。正力松太郎は読売新聞社主で、日本テレビ初代社長で、武道館初代会長で、元・警視庁官房主事であった。当然「要人警護シミュレーション」もついでに行なった可能性も高いだろう。

38-1：内田裕也氏と尾藤イサオ氏が、ビートルズをすぐ眼の前で観ている証拠写真。二人の衣装は前座出演時のままである。二人とビートルズの間に一切の夾雑物なし、まるで無名のドサ回りバンドのような距離感で演奏するビートルズ。この夢のような写真は、音が消えて時間が止まったようにも見える。一方、下の全景写真に眼を移せば、一気に「武道館の底で聞く大歓声」が立ち昇って来るはずだ。客席から撮られたこの写真は尾藤イサオ氏も所有していることが判明している。氏へは撮影者から送られて来たとのことだった。ちなみに、全景写真の右上に見える四角の正体は「日の丸」の一部である

50-5：この提供クレジットは、契約条項に「途中のCM不可」と定められていたことと無関係ではないとにらんでいる（提供：藤田知之）

50-6：まだ誰もいないステージ映像が最初にこうして映されたという事実も、この写真がなければ知るよしもなかった（提供：藤田知之）

さて以下に掲載の図版は、当時のTV画面を撮影した貴重な写真である。図版50‐1〜4（293ページ）は、リアルタイム世代の田村大介氏がご自分で撮影なさったものだ。これらを眺めていると1966年にタイムスリップしてブラウン管を息をこらして見つめている気分になってくる。ビートルズが本当に来日し、その公演の模様が日本のお茶の間に放送された「事件」を生々しく体感させてくれるのだ。
この4枚は、メンバーの名前が一人ずつテロップで紹介されていたということも伝えてくれる。現在ブートレグで出回っている同日映像にはこれがない。おそらくTV放送版よりさらに源流の素材が流出したのだろう。そんなことまで推察できる貴重な資料である。
田村大介氏を私に紹介くださったのは藤田知之氏だ。図版50‐5は、藤田氏のコレクションから「提供クレジット画面」（撮影者不詳）。スポンサーが異なる枠で放送した地方局はこの部分を一体どう処理したのだろうか。
伊藤　私の記憶では7月1日にオンエアした局はすべてライオンの提供だった気がしますから、この日は提供の文字は差し替える必要がなかったのではないでしょうか。
後日放送した日テレ系以外の局も、すべてライオンの提供になるよう調整したのだろうか。今後の研究課題である。
図版50‐6は、藤田氏所有の「タイトル画面」写真だ（撮影者不詳）。モノクロで放送した局も多いが「カラー放送」と書かれたテロップを放送時にどう処理したのだろうか。
伊藤　キネコには、スーパーされている文字をぼかすような技術はありました。この辺のことは当時の技術屋に聞くのが一番なんですが、わたしの知る範囲の人間はみんな墓の中です。TVマンは短命な人が多いんです。
#51
放送時のタイトルとテロップの謎
今年（2013年の初出時）の1月3日、日本経済新聞にこんな記事が載った。
1966年に日本武道館で行なわれたビートルズ日本公演で、厳重な警備や興奮したファンの様子を記録した映像フィルムが警視庁に残っていることが

■書誌情報
書名：ビートルズ来日学　1
著者：宮永正隆
定価：3,520 円（本体 3,200 円＋税 10%）
発売：2026 年 5 月 20 日
ISBN：9784845644360
発行：リットーミュージック
商品情報ページ　https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3126317103/

●本書に登場する人々
第 1 部　日航機でともに過ごした人々
日本航空客室乗務員たち／東レ・広報宣伝部長

第 2 部 さまざまな職業をとおして
日本テレビ・ディレクター／協同企画・ビートルズの運転手／カメラマン／日本テレビ音楽班・フロアマネージャー／武道館ビートルズ楽屋でお茶くみを務めた女性

第 3 部 東京ヒルトンホテルのスタッフたち
宴会場エンジニア／10 階担当ハウスマン／10 階担当ハウスキーパー

第 4 部 ビートルズの日本みやげ
テーラー山形屋スタッフ／朝日美術スタッフたち

■PROFILE
宮永正隆（みやながまさたか）

音楽評論家。1960 年生まれ。早稲田大学法学部卒。
ポール・マッカートニー、ヨーコ・オノ、ショーン・レノン、ジャイルズ・マーティンらの単独取材、ジョン・レノン・ミュージアム展示品解説執筆、英国 EMI 公式書籍『The Complete BEATLES Recording Sessions』日本版監修者として原書にないデータも加筆し原著者から賞賛を獲得した。知識と愛情に裏打ちされた骨太なビートルズ論は国際的に評価も高く、その評論活動は「ビートルズ大学」の名称で浸透し、メディア出演・執筆・講演などで発信される。
2016 年『ビートルズ来日学』（旧版）はミュージック・ペンクラブ音楽賞（著作出版物賞）。桑田佳祐氏も、自身のビートルズ賛歌「月光の聖者達（ミスター・ムーンライト）」は「ビートルズ来日学を愛読する中で生まれた」と公言する。

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』や T シャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：塚本由紀）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp